

---

# マジ ぼわ

もずく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マジ ぼわ

### 【Nコード】

N3977Z

### 【作者名】

もずく

### 【あらすじ】

いつも通りの朝、いつも通りの街並み、いつも通りの日常……のはずが！？小人！？エルフ！？未知の大陸！？そんなもの聞いたことないぞ！！」 秋山千秋君、あなたは異世界の住人です」世界最高峰の頭脳を持つ少女、東雲紫乃に訳のわからない事を告げられた少年・秋山千秋は異世界を守るヒーロー（？）になれるのか！？

## プロローグ ⅰ (前書き)

この小説はフィクションです。

この小説に登場する団体、人物、国家、製品、その他ありとあらゆる固有名称は実在、或いは歴史上すべてのものとは、名称が同一であつても関係がありません。

## プロローグ Ⅰ

寂れた商業ビルの外階段を駆け上り、勢いよく屋上に飛び出る。障害物が消え、広くなった空を見上げると、放物線を描きながら、西に向け凄まじい速度で飛ぶ”何か”の姿がはつきりと見える。辺りを包むのは、甲高い耳鳴りのような音と、旅客機が目の前を通り過ぎていくかのような轟音。

音源は白い尾を引きながら、瞬く間に西の地平線の向こう側に消えた。

## 次の瞬間

白い光に世界が包まれた。

「うわぁっ……はぁ、夢か。」

静まりかえった自室のベッドの上で、安堵のため息と共に、思わず一人ごちる。

先ほどとまでいた屋上とは違う、いつもの見なれた自室を見渡し、自分がいる場所を再認識する。

ノートパソコンが乗った勉強机と本がぎっしり詰められた本棚。自分が座っているベットの対角線上には姿見付きのクローゼット。部屋の中央には天板がガラスでできたシンプルな丸型の台と二人掛けのフロアソファ。

まぎれもない自分の部屋だ。

それにしてもいやにリアルな夢だった。

未だに夢の淵を行ったり来たりしているようで、おまけに頭に霞がかかったかのようにぼんやりとする。

別段暑い訳でもないのに、それこそ階段を全力で駆け上ったあとの

ように汗に濡れている。

顔に貼りつく髪と、水分を含んで冷えた寝巻が、体にのしかかる疲労感と相まって、いつそこの不快感を覚える。

辺りは真つ暗で、今が夜更けなのか、それとも明け方なのか、窓の外風景を見ただけではいまいちはつきりとしない。

枕元のデジタル時計に目をやると4:19と表示されている。

仕様上夕方なら16:19と表示されるはずなので、今は夜明け前だということになる。

今日は、世間でいうところのゴールデンウィークを目前に控えた、最後の平日である。

この時期だと日の出まであと1時間弱、行動を開始するには早すぎる時間帯だ。

かといって、寝なおす気分にもなれない。

汗に濡れて貼りつく寝巻が気になるのと、普段5時に起床しているため、寝るには中途半端な時間だったからだ。

仕方ない、いつもより少し早い、そろそろ起きるか。

汗を吸ったTシャツを代え、上から有名スポーツメーカー製の濃紺のジャージを羽織る。

ズボンも上とセットのジャージにはき替え、水だけで軽めに顔を洗い歯を磨く。

溜まっている汚れものを洗濯機に放り込み、適当に洗剤と柔軟剤を入れて洗濯機のスイッチを入れる。

一通りの準備を終え、スポーツタオルとポータブルミュージックプレーヤーを手に、玄関へと向かう。これから、毎朝の日課であるランニングをこなすためだ。

出発時間はいつもより少し早い、それ以外はいつも通り、家を出発し、近所の河原にあるジョギングコースを中心にランニングを行う予定だ。

愛用のスポーツシューズに足を通し、ほどけないよう少しきつめにひもを結ぶ。

BGMを決めつつイヤフォンを耳にいれ、さあいくぞと腰を浮かせたとき、

なんの前触れもなく激しい眩暈に襲われた。

転倒してけがをしないようにと慌てて腰をおろし、手について体を支える。

世界が歪む。頭の中が掻き回され、五感が何者かに乗っ取られたような気さえする。平衡感覚を取り戻すまでの間を、襲い来る不快感と戦いながらそのままの姿勢でなんとかやり過ごした。

以前から眩暈に襲われることもたまにあったが、生活に支障をきたすほど酷い訳でもない、体質のせいだと割り切って過ごしていた。

起立性低血圧、いわゆる立眩みというやつで、脳に障害があったり

神経系に問題を抱えている訳ではないから放っておいても心配ない、と医師のお墨付きも貰っている。今回の眩暈もおそらくその類の症状なのだろうが、なにぶんあそこまで酷い症状は経験したことがないため、いつものことだと流すほどに楽観視はできなかった。もし今後何度か繰り返されるようなら、病院での受診を考えた方が良くかもしれない。

眩暈が収まった直後は結構気持ち悪かったが、様子見のため5分くらいじっとしていたらすんなりと回復したみたいだった。

幸いなことに、症状を引きずるようなこともなく、心身ともにこれといった異常も見られない。走っても支障はないだろうと見当をつけ、家の鍵をかけたことを確認し、予定通り日課のランニングを決行するべく家を後にした。

ランニング自体は体力維持を目的としたもので、特別体を鍛えてどうこうする予定も今のところない。負荷がかかり過ぎない程度のスピードを維持したまま、大体1時間くらいを目安に走る。

中学時代は運動系の部活動に所属していたが、高校に入ってから以前のように激しく運動する気分にもなれず、帰宅部を貫いている。貫いている、と言ったら確固たる信念でもあるかの様に聞こえるが、そんな大層な理由があるでもなく、事実在即した言い方をすれば、仮入部期間に適当な部活を見つけることができず、乗り遅れた惰性で今のポジションに甘んじている、ということになる。

そついった背景から、部活を引退して以来数カ月運動とは無縁だっ

た訳だが、みるみる衰える体力に危機感を覚え、今年度に入り、高校入学とほぼ同時期にランニングを始めた次第である。

運動自体はどちらかと言えば好きなので、体を動かす楽しさも相まって意外と続いている。

早起きも得意で、受験期間中早朝に勉強をしていた事もあり、別段苦にはならなかった。

ここ最近、家を出発するころには空もだいぶ明るくなってきて、河原に出れば、朝日を背負う閑静な住宅街が作りだす幻想的な光景を拝むこともできる。

今日はいつもより早い時間に家を出たため辺りはまだ薄暗く、いつもと異なる光景に少し新鮮な気分になったが、それでも折り返し地点に差し掛かるころには辺りも充分明るくなり、駅に向かう会社員や学生の姿が散見されるいつもの光景を取り戻していた。

家に着いたのは、BGMに選んだアルバムが丁度終わったときだった。時刻はまだ6時前、いつもより30分程早い。玄關脇の置物の下（いつもの場所）に隠した鍵を取り出し、ドアの鍵穴に入れて回す。

手ごたえがない。

試しにドアノブを回してみると、すんなりとドアが開いた。

諸事情により今朝は家に誰もいないから、家族の誰かが開けた、ということはないはず。  
こんな早朝に空き巣もないだろうし、家を空けるとき鍵をかけ忘れたのだろうか？  
確認したような気がしなくてもないが、まあそういうこともあるだろう、と軽い気持ちで家に入る。

「よう。」

見てはいけないものを見たような気がして、思わず一度開けた扉を閉じた。

いやいやいやいや、違う。見間違いだ。  
そんなわけではない。

大きく深呼吸して、もう一度ドアを開ける。

「よう。」

……デジャヴユだ。  
どうやら見間違いではなかったらしい。

目の前には三和土を上ってすぐのところの腰掛けた”小さな”おじさん。  
どうやらこの人に挨拶されたらしい。

緑色のジャージの上下にたるんだ肉を仕舞い込み、よれよれの白い肌着と、これまたよれよれの白いソックスを装備している。髪の毛の生え際が後退した頭と、無精ひげを生やした顔は、どこかの橋の下か公園で見たことがあるような気がしなくてもない。

容姿だけ見ると別段おかしいところもない、ただのだらしない中年のそれだ。

明らかにおかしいのはそのサイズ。

座ってるからはつきりとは分からないが、背丈はおそらく30cmくらいしかない。

130cmではない、30cmだ。

下手したら玄関に並ぶ靴の方が大きいかもしれない。

体の各パーツも同様に小さく、商業用の人形に見えないこともない。メタボのみすぼらしいおじさんのフィギュアが、いったいどの界限に需要があるのか甚だ疑問ではあるが。

ともかく、そんなミニマムサイズのおじさんが、我が家の玄関に鎮座していた。

突然の理解の範疇を超える出来事に面喰い、呆気にとられて佇んでいると、件のおじさんが口を開いた。

「ここ、秋山 紅葉の家であってる？」

「……あ、ああ。」

容姿に気を取られていたせいで、話しかけられたことに気付くのに時間がかかり、質問に答えるのがワンテンポ遅れる。どうやら相手は日本語が話せるらしい。

アキヤマ  
秋山 紅葉。

2つ下の、血を分けた妹の名前だ。

どう鼻屑目に見ても変人なのだが、何故か老若男女を問わず慕われており、近隣住民や中学の同級生からはカリスマ的な支持を集めている。

高校でも結構有名で、何気ない世間話で名前を耳にすることも多い。どうやら、妹に用があってここにいらっしゃるらしい。物取りではないようで少し安心。

……いやいや、安心じゃない。人心地ついている場合でもない。この期に及んで物取りかどうかなんて些細なことどうでもいい。いやどうでもいいという訳でもないけど、むしろ警戒するに越したことはないけど、今考えるべきはそんなことじゃなくて。

「ということとは、ここが正解か。」

……ああええっと、申し遅れました。私、森永 グリコと申します。以後お見知りおきを。」

「……秋山 千秋です。こちらこそよろしく。」

さっきまでの砕けた口調から一転、慇懃に自己紹介をされ、思わずテンプレートな挨拶を返す。

自宅の玄関での会話にも関わらず、グリコと名乗った小人に、完全にペースを握られている。

いや、だから今はペースなんてどうでもよくなって。

いったいなんなんだこの生き物は。

そういえば以前、とあるテレビ番組の都市伝説をとりあげるコーナーで、小さいおじさんと出くわした、という話を聞いたことがある。詳しくは覚えていないが、いつの間にか現れ、いつの間にか消え、見かけた人は幸運が舞い込む、といった内容だった。

聞いたことがある、と言っても、座敷わらしと何が違うのかと聞かれれば、何が違うんでしょうねえ、と返してしまう程度の知識しか持ち合わせていない。

しかし、少なくとも都市伝説上のおじさんに、初対面の家に無許可で上がり込み、住人と自己紹介付きで挨拶を交わし、そのうえ家族構成を尋ねるほどずぶとい、もとい社交的な設定はなかったはず。

「突然申し訳ない。呼び鈴を押しても誰も来ないし、どうやら皆さん寝ているみたいだから、勝手に上がり込ませて貰った。ところで、紅葉ちゃんはまだお休み中かい？もし起きているなら呼んできて欲しいんだが。」

こちらの混乱をよそに、先ほどの碎けた口調で要件をつたえるグリコ。

基準はよくわからないが、場面によって丁寧な口調と使い分けているのだろうか。

話し口から察するに、紅葉がこの家にいるという前提で話を進めて

いるようだ。

しかし、残念ながら紅葉は今この家にはいない。

「妹なら今出かけています。要件があるなら伝えておきますが。」

不可解な事態から来る動揺をできるだけ表に出さないように気をつけながら、不自然にならない程度に丁寧に、しかし紅葉の現在地や帰宅予定日などの情報を与えないよう注意してグリコの問に答える。

それを聞いたグリコの顔が、面倒くさいという感情を前面に押し出しながら露骨に歪んだ。

どうしても直接紅葉に会いたかつたらしい。

相手によっては非常識ととられてもおかしくない早朝のこの時間帯に、こうやってわざわざ出向いたのも、確実に家にいる時間を狙ったことだろう。しかしその目論見も外れ、ただの徒労に終わってしまったことへの不満感がその表情から惜しげもなく滲み出ていた。

「うーん、まじか。なら週末辺りにもう一度出直すことにするわ。」

今度はこんな早朝じゃなくて、夕方頃訪ねさせてもらうんで、紅葉ちゃんにもよろしく伝えといてくれ。」

相手方も、どういう要件かを言うつもりはないらしい。

こちらが何かを質問する間も与えず、「では、失礼。」と言い残し、煙のように消えてしまった。

「……はあ。最近の小人は瞬間移動ができるのか。」

現実離れた出来事の連続に、無意識にため息がでてくる。

とりあえず冷静になって今朝の出来事について考えてみる必要がありそうだ。

## ブローグ 1 (後書き)

誤字脱字や読みにくいなどのご指摘、ご感想お待ちしております。

## プロローグ Ⅱ

僕の妹、秋山 紅葉には、放浪癖のようなものがある。

小学校を卒業する少し前から、まとまった休みがあると一人でどこかに出かけてしまい、数日間家を空けることが多々あった。

”放浪癖のようなもの”と言ったが、ふらつと出て行ってふらつと帰ってくる感じではなく、自分でしっかり期間を決め、必ず期限内に帰ってくるので、ニュアンス的には放浪というより渡りの習性の方が近いかもしれない。

今日、この家に紅葉がないのもそういう理由からだった。

土日休んで月曜日に登校し、火曜日からゴールデンウィーク、という今年の連休日程に何故か腹をたてた紅葉は、そのことに対する恨みと「1週間ほど旅に出ます。今週の月曜日は自主休講致しますので、中学校と担任の先生にその旨をお伝え下さい。」と綴った置き手紙を残し、土曜日の夜明け前に家を出ていった。

いつものことなので特に心配とかはしていないが、一般的に考えれば、ローティーンの女の子を一人で旅させること自体正気の沙汰とは思えない。

しかし我が家では、親は妹のことを信頼しているのか、はたまた放任主義に託<sup>かか</sup>けて育児を放棄しているのかは知らないが、自発的な行動に関しては一切口を出さないし、僕にも妹の突発的な行動をいちいち止める気が全くないので、特に問題視されるでもなく当たり前のように認められている。

そのため、わざわざ夜逃げの真似ごとをしないで誰も引き留め

ないのだが、本人が気にいつているのか、第一回目の旅のときから、ご丁寧に手紙をしたため、睡眠時や外出中を狙って家を出ていくスタイルを貫いている。

目的地は毎度ばらばらだが、さすがに国内を出ることはない。いや、” 出ることはない”、というよりは” 出してもらえない”、と言っべきなのかもしれない。

そもそも未成年の出入国自体厳しく制限されており、中学生単身の国外旅行が認められるはずもないのだが、どうやら紅葉は納得していないらしく、不法出国を目論で何度か騒動を起こしているらしいのだ。

パトカーで強制送還される紅葉を出迎えた経験も一度や二度ではなく、身内としては非常に肩身が狭い思いをさせられている。

幸いなことに、彼女が企てた不法出国騒動は全て未遂に終わっているが、未遂でもれっきとした犯罪である事に変わりはない。

普通なら何かしらのペナルティーがある筈なのだが、まだ未成年なのと、手段が稚拙すぎて当面ミッションが成功する見込みがないからという、逆に不安になる理由で見逃してもらっている。

身内が前科持ちというのも何かと不便なので、こちらとしてもありがたい限りなのだが、それでいいのか警察よ、と心配にならないでもない。

ちなみに、長期休暇のたびに出国ミッションを決行しようとするので、最寄りの空港の職員からは季節行事として名物扱いされているらしい。

馴染の警察官からその噂を耳にしたときには、兄として空港職員の皆様方一人一人に土下座巡りでもしようかと思ったのだが、その

警察官に笑いながら止められて断念した。

今回はどうやら素直に日本国内での旅行を楽しむことにしたらしく、今のところ空港で荷物にまぎれて飛行機に乗り込もうとしていたところを発見された、といった旨の連絡もない。

旅先でトラブルに巻き込まれることはあれど、基本的に自分ひとりで解決できるため、よほどのことがない限り、ゴールドンウィークが明けるまでは家に帰ってくることもないだろう。

食卓に一人分の食器を並べ、焼きたてのベーコンエッグとカリッカリに焼けたバタートーストを盛り付ける。

紅葉が家にいるときは彼女が朝食を作ってくれているのだが、今日のように外出しているときは自分で簡単なものを作って一人で食

べるようにしている。

ひとりで食事を取ると考え事が増えるものだ。

それは今日とて例外ではなく、自然と先ほどの来訪者のことを考えていた。

森永グリコと名乗った彼は、明らかに世間一般に知られている種類の生命体ではなかった。

外見は、30?に満たない背丈を除いて人間のそれとほぼ同じ。丁寧語と砕けた口調の使い分けが出来るくらい日本語の扱いに長け、瞬時にその場から姿を消すことができる摩訶不思議な力を使う。

彼と会話を交わした数分間は、これまでの人生16年間で積み重ねてきた世界観を根底からぶち壊すには充分に長すぎた。

たかだか16年を生きてきた程度の知識で、世の中の全てを知った気になるつもりはもちろんないが、それでもあり得ることとあり得ない事の区別くらいは付く。

そして、あのおじさんの存在は明らかに後者だ。

宇宙人や幽霊は存在するか。

一時間前の僕がそう尋ねられたら、世界にはまだまだ知らないものがたくさんあふれているし、宇宙人や幽霊といったオカルトの類が実在してもおかしくはないだろう、なんて当たり障りのない答えを返していたかもしれない。

しかし実際に目にしたら話は別だ。

今まで存在の片鱗を見せるだけにとどめ、架空と現実の狭間を行き来していたような曖昧な存在が、こつこつと姿を現し、二三言葉を交わし、あまつさえ次に会う約束を取り付けるようなことが許されてもいいのだろうか。

そういえば、脳に障害がある人には幽霊が見える、という話を聞いたことがある。

脳の視床下部や側頭葉に何らかの異常がある人は幻覚を見ることがあり、それを幽霊や神だと勘違いする人も多いとか何とか。

あまりあてにしたいくない可能性ではあるが、そう考えると辻褃も合う。

小さなおじさんはそもそも幻覚で、本来ないものを脳によって見せられていたとすれば、あまり不自然な話でもない。

先ほどの激しいめまいも、脳の異常による症状の一つだと考えれば納得がいく。

可能性としてはこの幻覚説が一番有力だが、しかし、そうだとすると引掛かる部分がいくつもある。

一つは、あまりにもはっきりと受け答えをしていたことにある。会話も一応矛盾なく成立していたし、何より名前や目的などの設定がやけに具体的だった。

脳が無意識に補完したにしては、あまりにも出来過ぎているような気がしないでもない。

もう一つは、精神的な動揺が殆ど無かった点だ。

もし感情や本能行動を司る視床下部や、聴覚嗅覚などの情報や記憶・言語理解・感情・判断などの理性を制御する側頭葉に何らかの障害があつたら、感情や言動に分かりやすい異常が見られるはずなのだ。

もちろんある程度は混乱したがそれでも冷静さを失うほどではなかった。

客観的に判断できる第三者がこの場にいない以上胸を張って言うことはできないが、自分を省みる限り、心身ともいたって正常だ。

まあ、その道の専門家でもない一高校生が、ましてや自分自身の脳の異常なんていくら考えても詮無い話ではあるのだが。

念のため一度脳の検査を受けた方がいいかもしれないが、今朝の来訪者を幻覚と看做すには少し短絡的すぎるな、くらいにとどめとくのが妥当だろう。

否、もしかしたら、神や精霊の類なのかもしれない。

神に近い存在はいるだろう、と漠然と思つてはいるが、特定の宗教に属して特定の神に信仰をささげている訳ではない。

その他大勢の日本人と大体同じだ。

なので、仮に彼が土着の神みたいなものだったとしてもあまり抵抗はないし、未確認生物や幻覚なんかよりは、神が妹に会いに我が家を訪ねにきた、と言う方が話のオチとしては数倍マシな気がする。

ただ、神や精霊のような自然、ひいては世界を司る崇高な存在が、我が妹のようなただの変人に用があるとは、とてもじゃないが思えない。

犯罪未遂さえなかったことのできる彼女のカリスマ性にてられ

たのдарろうか。

神をも虜にする人物が身内にいるとは、なんともぞつとしない話である。

思考が徐々に逸れ出したことに気付き、いったん考え事を切り上げ、いつの間にか空になっていた食器を片づける。

いずれにせよ、いくら考えたところで答えが出るような問題ではない。どうせあと何回か家に来るのだ。いずれはつきりするだろう。それまでは棚に上げておくのが上策だな。

そう自分に言い聞かせ、頭の中で区切りをつける。

時間も丁度いいことだし、そろそろ準備を始めよう。

とはいっても、残っている準備なんて殆ど無い。ジョギングから帰ってきてすぐシャワーを浴びたので、服はそのときに着替えた。

あとは歯を磨いて身だしなみを整えるくらいか。

今朝の予定を立て、それを消化すべく行動を開始したこのときの僕は、しかしながら、ついさっき棚上げたばかりの問題をすぐに引っ張り出さなきゃいけないとなるとは、露ほども思っていなかった。

南北に走る大きな川の東側に位置するこの町は、川を挟んだ西側に位置するオフィス街の著しい発展に伴い、ベッドタウンとしての人口を増やしている。

自治体の長であった人物が推し進めてきた特区構想が近年ようやく実現し、経済特区第一号として目覚ましい発展を遂げた西のオフィス街。特区構想の実現以来多くの人が押し寄せ、昔の田園風景を呑み込んで膨れ上がった東の住宅街。

中心に流れる川を境に異なる毛色を持つ街は、お互いがお互いを支え合いながら成長してきた。

その勢いは、特区制定10周年を迎える今でも衰えることはなく、地価も未だに上昇の一途を辿っている。

両者の発展に伴い、西側には歓楽街、東側には繁華街が栄え、娯楽の街としても賑わいを見せている。

## 経済特区。

経済の発展の為に、法的、行政的に特別な地位を与えられ、税制・福祉など様々な面で企業活動を支援するために設けられた地域だ。

この日本にも何箇所か似たような地域は存在するが、その中でも随一の発展を遂げたのがここ、九重市だった。

そしてもう一つ、この都市には、”人類の発展を担う人材育成”というコンセプトを基に、”教育特区”というものが設けられている。

東側に広がる住宅街のさらに東側に位置する、教育機関が集められた地区だ。

日本中から優秀な教育者を集め、金に物を言わせて整えさせた最新鋭の設備のもと、一般科目から専門分野まで幅広く学べる、教育の聖地として、世界中に名を馳せている。

されに、この特区内の学校に通う学生は、条件付きで費用の補助が受けられることを筆頭に、他では得ることができないような様々な特典が与えられる。

その設備と特典を目当てに、国内外問わず世界中のいたるところから優秀な学生が集まり、開設から10年足らずして世界の教育の頂点に君臨するまでに成長した。

特区内の学校に我が子を通わせることが、世の親の夢の代名詞として語られるようになってからずいぶん久しい。

教育特区には、小学校が三つ、1000人規模の大きな中学校が一つ、高校が六つ、大学が三つ、計13校の学校がある。

小中学校には学区制が採用され、特殊な教育や制度を設けず、一

一般的な公立の小中学校と殆ど変わらない扱いがなされている。

これは、多感な成長期を過ごす小中学校を過ぎすぎずした競争の場にしたくない、という自治体の配慮で、通う生徒も近隣の住民が全体の9割以上を占めている。

とはいえ教師陣が優れていることには変わりなく、他地域の同年代の子供に比べて秀でている生徒が多いというデータもある。

どうしても我が子を入学させたいと、学区に居を構えるために押し寄せてくる教育熱心な保護者の対応に、自治会も四苦八苦しているのだとか。

一方高校・大学では、全ての人に平等に学ぶ機会を与えるべく、入学に適当な学力さえ備わっていれば、身分や出自を問わず世界中の生徒を広く受け入れる方針を取っている。

それぞれの学校には大きな特色があり、スポーツ系の学校、工業系の学校、芸術系の学校など、学校ごとに力を入れている専門の分野がはっきり分かれている。

もちろん普通科進学校もあり、将来像がはっきりしない生徒や広い分野を学びたい生徒に対する配慮もきちんとなされている。

入学するためには厳しい試験があり、どの学校も並大抵の努力では入学できない難関校として広く知られている。

経済特区と教育特区。この地区の都市開発の根幹、特区構想の双壁をなす二大プロジェクトのおかげもあり、今ではこの街も、世界版『住みたい街ランキング』上位ランカーの常連であったりする。

そういつ、世界に誇れる街、九重市に僕は住んでいる。

生まれたときから16年間、一度もこの街を離れたことはなく、小中高と順調に教育特区内の学校に通うという、誰もが羨む華々しい経歴も持っている。

しかしその実、それほど頭がいい訳でもなく、いや、中学までは成績も割と上位にいたのだが、それでもずば抜けて優れた分野がある訳でもなく、『そこそこ勉強ができる人』という当たり障りのないポジションを貫いてきた。

その特筆すべきもない平凡な人間であるところの僕は、今現在、なにをまかりまちがったか”九重高等学校”という、特区内でも更に異色の、『学問の最高峰』と世界中から称賛をうける高校に通っている。

記念受験として受けた高校に運がいいのか悪いのか受かってしまい、あまりの現実感のなさに迷わず辞退しようとしたのだが、興奮した教師陣に乘せられてその気になり、いつの間にか入学届を出してしまっていたという次第だ。今では苦い思い出として脳内のアルバムでわりとそんざいに保管されている。

余談だが、そんな僕に、「過ぎたるは及ばざるがごとし」と言い放った紅葉の姿が、妙に印象に残っていたりもする。

そういつた経緯で身の丈に合わないどころか場違いにも程がある高校に通っている訳だが、僕としてもドロップアウトは避けたいところなので、今のところは、高校生活を無事乗り切れるぎりぎりのラインを保ちつつどうにか過ごしている。

その九重高校、通称”九校”の1年2組の教室に入り自分の席に着くと、すでに隣の席に話しかけられた。

「おはよう、千秋君。どうしたんだい、顔が真っ青だよ。体調でも悪いのかい？」

「そうか？別に普通だけど」

今話しかけてきたのは、マルコ・フェスタという名のイタリアから来たクラスメイトだ。

ウェーブがかった黒髪に、ルネサンス時代の彫刻のような整った顔立ち。背丈は179cm弱の僕より少し高く、体つきも暑苦しくない程度にがっちりとしていて、同年代の日本人にはない大人の落ちついた雰囲気を身にまとうている。

しかもこの世界最高峰の学問機関の入学式で新入生総代を務めたほどの天才で、つい1、2ヶ月ほど前日本に来たばかりにもかかわらず、日本人のように日本語を扱う様子は、圧巻を通り越して芸術的でさえある。

そんな一見完璧な彼にも、ジャパニーズカルチャーと呼ばれるものには目がない日本マニアという、残念な一面が存在したりする。

本場日本のオタクと比べても遜色ないアニメの知識を持ち、趣味で習字と陶芸をたしなみ、侍に憧れてイタリアで始めた剣道にいたっては道場を開けるほどの腕前を持っているらしい。

彼と仲良くなったら、二次元の和服美少女に興奮する美形イタリア人、という世にも珍しい景色を拝むことができるだろう。

性格も割といい加減で、一度口を開けば身にまとっていた大人の雰囲気霧散してしまつと、入学1ヶ月足らずで早くも周囲の女子からは残念がられている。

たまに世界トップレベルの天才だと言うことを忘れてしまつこともあるくらいだ。

マルコとはこの学校に入学してからの付き合いだが、馬が合うのか割とすぐに仲良くなり、学校がない日もたまに二人で遊んだりしている。

余談だが、休み時間中にまだ友達がない教室で暇を持て余し、筆ペンを使って行書体で名前を書く練習をしていたら「その筆のような物で何をやってるんだい!？」とキラキラと目を輝かせて尋ねてきたマルコに、「ジャパニーズ書道」と真面目な顔で答えたら予想以上に食いつき、成り行きで習字を教えることになったのが、彼と親しくなつたきっかけだ。

筆ペンを食い入るように見つめていたので、「いるか?」と渡してみたなら、奇声を上げながら抱きつかれたときは流石に少し引いた。ちなみに、九重高校男子寮の彼の部屋に行けば、小学生が書いたような「円子」の文字が飾られているのは余談の余談だ。

「本当かい?幽霊でも見たような顔をしてるよ。H A H A H A H A」  
「なにがH A H A H A H Aだ、アメリカンジョークのオチみたいなの笑い方しやがって。そもそもどこに笑う要素があった」

思わず突っ込むも、天才イタリア人マルコの何気ない、しかし、それでいて正鵠を得た発言に思わず苦笑する。

実はあれから、つまりは朝食を済ませてから今までの間、小人の訪問にも引けを取らないシヨッキングな出来事がいくつもあった。

おかげで精神的な疲労がかなり溜まっており、それが顔に出てしまっているのかと思うとやるせない気持ちになってしまっただった。

## プロローグ 〓〓

一つ目の異常に気付いたのは、学校の支度を終え、持て余した時間を使って朝のワイドショーを見ていたときだった。

画面に映った世界地図。

その太平洋上に、ある筈のない大陸が描かれていたのだ。

その大陸は太平洋の東側に位置し、南端は赤道をかすめ、北端は日本の九州とほぼ同緯度のところにあつた。

地図で見た限り、大きさはオーストラリアと同じか少し小さいくらい、五角形を東側に少し引き伸ばしたような形をしている。

最初見たときはなんかの冗談か、製作者側のミスかと思つたが、しかし、そのことに関して説明や謝罪はなく、それどころか以降も何度か同じ地図が使われてすらいた。

いい加減違和感を感じ、他の局にチャンネルを回してみるも、どの局でも同じような地図が使われており、当たり前のように番組が進行していた。

分かったことは冗談でもミスでもないと言つことと、”パシフィック大陸”という名前が付いていることくらい。

これはさすがに幻覚で片づけることもできず、思考停止から抜け出すまで随分と長い時間を要した。

詳しく調べてみようかとも思ったが、もしかしたら他にも何かあるかもしれないと思い直し、見逃さないようテレビにかじりついていたら、案の定というかなんというか、新出語句がいたるところに

出てきた。

『大型魔獣襲撃も無傷の撃退　マジ　ぼわ戦士大手柄　負傷者なし』  
『歌手　KENGO（28）　エルフ族一般女性（93）　と65  
歳年の差婚』

今朝のニュースのラインナップの一部分だ。

最初は訳も分からず酷く混乱したが、家を出るころには一周回って逆に冷静になっていた。

もし仮に頭がおかしくなっていたとしても、異変がある度にこちらがリアクションをとらねば周囲に悟られることはないはずだ。

まだ異常だと感じる事が出来るだけの判断能力も失っていないし、当面は大丈夫だろう、と何度も自分に言い聞かせた。

しかし、その努力も紅葉との電話で水泡に帰すこととなる。

登校している最中、来客があったことを告げるために、紅葉に電話をかけた。

彼女も森永グリコという名前に心当たりはないらしく、「どんな人だった？」という質問をされたので、少しだけ好奇心が湧いて包み隠さず話してみることにした。

「身長が30cmくらいの小さなみすぼらしいおじさんだな。

禿げてて、ビールっぱらで、上下のジャージを着ていた気がする。僕は神様かなんかの一種だと思ってるんだけど、紅葉はどう思う

？」

「はあ？神様？

お兄ちゃん頭おかしいんじゃない？」

うん、望んだ通りのリアクションだ。ここにきて初めて常識的な回答を得られたことに、少しだけ嬉しくなる。

妹に貶されながら喜ぶ兄の図の完成だ。

「いやな、僕もおかしいとは思ってたんだけどな、どう見ても身長は30cmくらいで……」

「だから、それ、”小人族”の人でしょ？神様な訳ないじゃん。お兄ちゃんついに現実と妄想の区別がつかなくなったの？」

「……え？小人族？」

思わず聞き返す。何を言っているんだこの妹は。会話が全く噛み合っていないじゃないか。

「だーかーらー！！小人族！！

身長30cmくらいのおっさんでしょ？どう考えても小人族じゃない。

なに、お兄ちゃん本当にどうしちゃったの？なんかあるなら帰ってこようか？」

「……いや、そんな心配されると流石にみじめだからやめる。ただの冗談だ、気にするな」

このときはなんとか誤魔化せたが、その後の会話は内容すら覚えていない。

さも当然のように身内の口から出てきた”小人族”という単語。あれじゃあまるで、日常生活に小人の存在が溶け込んでいるみたいじゃないか。あれは、今朝起きたあの一連の出来事は、幻覚ではなかったというのか？それとも記憶が、今まで積み重ねてきた世界観自体が間違っているともいうのだろうか。

何が現実で、何が幻なのか。  
何が真実で、何が間違っているのか。

学校に到着するまで、ついぞその答えが出ることはなく、上手く切り替えられぬまま今に至る、という訳だ。

「なあマル」

「ん？」

結論を出すには、あまりにも材料が少なすぎた。どうにかして、自分の異常を悟られないように情報を集める必要がある。

ここはいったん幻覚の可能性を排除し、世界が変化したと言う前提で話を進める。

まずはある程度身近な人から情報を集め、事前知識を固めよう。ネットや本で調べるならば、情報の真贋を見極めるための地が必要だ。その点人に直接話を聞く分には、情報量は劣るかもしれないが、概ね真実にそつた話が聞けるはずだ。

「お前、地元で小人にあつたことある？」

あるならそれに越したことはない。ないならしないで、そこから話を広げることも容易にできる。もし予想外の反応が返ってきてても、様子を見つつ方向転換すれば訝しがられることもないだろう。

「うーん、そう言えば小人を直接見たのは日本に来てからだっただかな。

観光で遊びに来る人たちも結構いるらしいけど、やっぱり日本ほどたくさんはいないからさ」

よし、一発目からビンゴだ。やはり、小人は一般的に実在するものとして考えられているらしい。

このようにして、ある程度あてずっぽうに質問して反応を見ながら話を展開していけば、どうにか必要そうな情報が得られそうだ。地雷を踏まないよう気をつけさえすれば、怪我をすることなく下地を固めることができるはずだ。

「ふーん。じゃあエルフは？」

「エルフならイタリアにもいたよ」

「でもエルフもそんなにたくさんいる訳じゃないんだらう？」

「そりゃ、日本に比べればね。」

「でも、やっぱりエルフって目立つからさ。ほら、遠くの人ごみにまぎれてても、なんとなく分かるだらう？」

「どうやら、小人やエルフといった種族は日本にたくさんいるみたいだ。なにか歴史的な理由でもあるのだろうか。これは調べてみる必要があるそうだな。」

「まあ、エルフは男のロマンと言っても過言ではないからな」

「おお、流石千秋君。分かっているじゃないか。」

あの身にまとう神々しいオーラ、すべてを癒す慈愛に満ちた笑顔。そして滲み出るおっとりとした雰囲気。

日本人を除いて、あれほど和服が似合いそうないきものが他にいるかい？」

「判断基準和服かよ。」

「そういえばこの学年にエルフいたよな？和服のこと頼んでみたらどうだ？案外快く引き受けてくれるんじゃないか？」

次は少し突っ込んだ質問を試みる。

ここで外したら危ないが、疑わせないためには相手が食いつくよ

うな話題を提供する必要がある。  
ある種の賭けだ。

「男の和服見たって面白くないだろう！！やっぱり千秋は何も分かっていない！！君には失望した！！どうせ頼むんなら2年のイヴさんだろう！！！」

おお、やっぱりこの学校にもいるんだ。言ってみるもんだな。マルコの様子を見る限り、どうやら不信がられてもいないようだ。

「お！？皆聞いた？」

マルコが2年のイヴさんに、和服を着てくれるよう頼みに行くらしいぞ」

「ちょッ！！ばッ！！まッ！！！」

「言葉になっていないぞマルコ」

今の発言を聞いたクラスメイトがわらわらと集まってくる。

「まじですかマルコさん！！！」

「さすがッすマルコさん！！！」

「マルコさんかけーっす！！！」

「写真撮っていいっすかマルコさん！！！」

「抱いて下さいマルコさん！！！」

このクラス、うすうす気づいていたが悪ノリが酷すぎる。

マルコから言質が取れたと知るや否や、瞬く間に拒否できない流れを作りだしてしまった。

なんだよこの団結力。

とても知り合って一ヶ月とは思えないぞ。

「まあ、僕も付いてってあげるから。頑張ろう?。」

「頑張ろう?じゃない!!そもそも僕は行くなんて一言も言っていないぞ。」

「日本男児たるもの、一度言ったことは貫き通せ!!。」

駄々をこねるマルコに大声で一括する。

マルコはそもそも日本男児ではない、という至極真っ当なツッコミをするものは、しかしこの場には誰もいない。

「……………日本……………男児?。」

マルコがはっ、と息を呑み、期待と困惑が入り混じった顔でこちらを見る。

その顔には「僕が日本男児を名乗ってもいいのだろうか」と書いてあった。

それを見て「そんなの当たり前だ」と、鼻で笑う。

心なしかマルコの顔が曇る。

否定されることを恐れている、そんな表情だ。

そんな彼の眼を見て、まっすぐ、大きくうなずく。

「大丈夫、お前はもう立派な日本男児だ」と。

マルコの表情がぱあっと明るくなる

「分かった！！僕、やるよ……ってなるかあ！！

どうしてその一言で僕がつけられると思った！？

お前は僕がただけ頭が弱い人間だと思ってんだよ！！」

「いやあ。日本大好きなマルコなら『日本男児』という言葉に否応なく飛びつくだろうと踏んでいたんだが。こいつは弱ったな」

「こいつは弱ったな、じゃない。確実に成功する体で練った作戦だったのかよ。」

しかもなんだよ、『日本男児と聞いたら興奮するイタリア人男性』って。存在そのものが事故レベルだろ。僕のプロフィールにそんなおぞましい設定を付け加えるな」

いやいや、きっかけを与えたのは僕だが、そもそも寸劇を始めたのはマルコだろうが。とんだ出来レースである。マッチポンプもいところだ。

「マルコは芸達者だな。」

分かりにくいフリでもきちん処理して、怪我すると分かっているから自分で突っ込んで行くんだもん。僕には真似できないよ。

それともノリ突っ込みはイタリアのお家芸なのか？」

「みじめだからいちいち解説を付けるな！！

それに、そんなお寒い文化イタリアにはない！！」

「おうおう、じゃばにーず伝統芸能をお寒いとな。あんな寸劇までやっというてよく言っよ全く」

「こんな低俗なものを日本の崇高な伝統文化と同列に扱うんじゃない。今すぐ腹搔っ捌いて詫びろ」

「マルコ、少し誤解があるようだが”ハラキリ”は日本の文化ではないぞ」

「それくらい知ってるわ！！

君はさっきからどれだけ僕を馬鹿にすれば気が済むんだよ！！」

「えー、そこはノリ突っ込みだろ。

『えっ、そうだったの？……ってそんなわけあるかい』くらい言えるだろ。

”ノリ突っ込みのマルコ”の二つ名が泣くぞ？」

「そんな情けない二つ名があつてたまるか！！

僕をそんな安っぽいセリフを吐くキャラに仕立てあげるんじゃない！！君はいつたい僕をどうしたいんだよ！？それとも致命的な馬鹿なのか君は！！」

リアクションが大きいマルコとのやりとりは実にいい暇つぶしになる。なんというか、多岐にわたり弄りどころを持っている男なのだ。

「まあ、四の五の言わずに頼みに行けよ。マルコならできない事じゃないだろう?」

「ぐっ……」

ともかく、無事エルフの少女と会う口実を得ることができた。これではようやく一歩前進だ。

## ブローグ 4

HRが終わり次の授業の準備を始める。

今日の1時間目は課題研究のガイダンスだ。

この九重高校では、1年生のゴールデンウィークが明けてからすぐ、課題研究というものが始まる。

課題研究とは、読んで字のごとく、各々が興味がある分野を課題として設け、それについて1年間かけてじっくり研究、論文をまとめて年末の研究発表会でその成果を発表する、という、九重高校独自のカリキュラムの一つである。

若い時分から、興味があるものを徹底的に調べる機会を与えることで、自分の力で問題を解決し、不思議に気付く目を養う、という目的のもと開校当初に導入され、以来全ての生徒が取り組んでいる伝統文化の一つだ。

ちなみに、特区が開設されたのは10年前だが、九重高校自体は意外と歴史が古く、数年前に開60周年を迎えたばかりだと聞く。

独自のとはいうものの、このカリキュラム自体は別段珍しいものでもなく、大学や高等専門学校、いわゆる高専ではほぼ当たり前のようにどの学生でも取り組んでいることであるの。

それを独自のというのにはやはり理由がある訳で、つまりこの学校における課題研究には、他校には見られない特徴がある。

まず、九重高校の課題研究の特筆すべきは、2年生から自分の研究室を持つことが許されている、というところにある。

もちろん全ての生徒に認められる訳ではないが、一定以上の学業成績を修め、研究したい分野に関するプレゼンをしてその分野に近い教授数名のお墨付きを貰うことができれば、誰でも自分の研究室

を持つことができる。

先生曰く「並みの天才でも難しい」らしいが、それでも毎年数名自分の研究室を持つ生徒がいるのだから驚きだ。

流石天下の九重といったところか。

しかし、わざわざ研究室を持たなくても、研究室ごとにくつつか研究テーマがあり、その中から生徒が好きなものを選んだり、分野にそった研究テーマを研究室に持ち込んだりすることもできるため、割と自由に自分が興味がある研究に取り組むことができる。

さらに、高校に隣接する九重大学との共同研究も多く、高校時代の研究を大学生になっても引き継ぐことができる。

博士課程まで進めば、最長で9年間一つの分野を研究する事も出来る、というのも九重高校ならではだ。

たかが高校生と言えど研究している内容はレベルが高く、海外の有名な学術ジャーナル紙にその論文がとりあげられたことも少なくない。

九重が学問のメッカとして注目される所以だ。

研究室を持ったりテーマを持ち込んだりできる上級生にたいし、1年生はすでにある研究室で、上級生や教授方が取り組んでいる研究の補佐をしなければならない。

といっても、そのまま二年生になってからもその研究を継続する人もいれば、研究室自体を変えたりする人もおり、いわば本格的な研究を始める前のお試し期間のような位置付けとして捉えられている。

1年生はゴールデンウィーク前後のこの時期に研究室を決めなければならず、今日はその為のガイダンスに時間が設けられている。

とはいえ、これまでの一か月間で大体の生徒は目ぼしい研究室を決めており、ガイドランスの内容も申請方法とか、事務的な手続きについての説明が大半を占めている。

「マルコは確か宇宙工学系だったよな？」

「ああ。」

惑星探査機を作ってる研究室があつてね、そこにいくつもりさ」

マルコは特化している分野がある訳ではない、いわゆる万能型の天才だ。

世界で最も難しい試験と恐れられている九重高の入試では、合格者平均が60点台中、全教科平均9割越えという化け物染みた成績を叩き出したこともある。

そんな彼の興味は宇宙にあるらしく、いくつかある宇宙工学系の研究室の中で「一番宇宙との距離が近いからね」という、あまり共感を得ることができなさそうな理由でその研究室を選んだらしい。

「そういう千秋はもう決めたのか？」

この前一緒に研究室廻ったときはまだ悩んでるみたいだったけど」

「ぐぬぬ」

「え？まだ決めてないンデスカ？」

急に表情が人を見下すそれに変わり、故意に片言を混ぜた日本語

で質問するマルコ。

こいつ明らかに馬鹿にしてやがる。

悔しいが、マルコの言うとおり、僕はまだ自分が所属したい研究室を決めていない。

九重高校に通う生徒の大半はすでに特定の分野に進路を絞っており、高校入学時にはすでにある程度の専門知識を持ち合わせているのが普通だ。

その専門知識を使って財を成している奴もそんなに珍しくない。

そんななか、義務教育の9年間「そこそこ勉強ができる人」のポジションに甘んじていた僕が特定の分野に明るい訳もなく、その上興味があるカテゴリーというものもこれと言っていないため、所属する研究室を決めあぐねていたのだった。

「申請の締め切りは連休明けの次の週の月曜日です。  
忘れないようにしてください」

「だってさ」

「わかってるやーい」

先生の言葉を使って急かすマルコに気のない返事をする。

とは言ってもなあ。

知識どころか興味すらない状態で研究なんてできるわけがない。  
適当に選んで配属されたところで、だ。

協力どころか邪魔もできないような僕が同室にい居座っているのは

相手方も迷惑だろう。

そういう人のことを指して英語では”Waste of space”というらしいが、場所の無駄にしかない僕は、そういう意味では、部屋にいるだけ好むと好まざるにかかわらず邪魔をしているということになるのだろうか。

思考がネガティブな色に染まりつつあるなか、そういう僕を察してか、はたまたいつもものただの無駄話か、マルコが話しかけてきた。

「そつえば、東雲さんの話はもう聞いたかい？」

これから始める話の前振りに、しかし、話題の中心であろう”東雲さん”という人物に心当たりがなく首をかしげる。

「誰だよ東雲さんって。1年生の誰かか？」

僕の口からこの質問が出るのは、僕にしてみれば言わば当然の事なのだが、質問したマルコにとってはそうでもなかったらしい。

彼の表情が呆れたそれに変わる。

「なにを言ってるんだい？」

新人生総代で挨拶してただろ、あの東雲さんだよ。

まさか千秋君が覚えてない訳もあるまいて」

「いやいや、お前こそなに言ってるんだよ。」

新入生総代はマルコ、お前だっただろうが」

確かにそうだった。

しつかり覚えていてる。

何せ入学式するとき、出席番号で一番前にいた僕、”A” k i y a m aの隣に、”F” e s t aのマルコが座ったいたことを不思議に思った記憶があるからだ。

余談だが、うちの学校では外国人の生徒に配慮して、学籍番号をA B C順に割り振っている。

ともかく、その少年が新入生総代を務めるほどの天才だと知ったときの驚きと納得はそう簡単に忘れられるものではない。

「それは嫌みかい？」

確かに彼女には負けたが、なんども言ってるようにあれは仕方のないことだった。

だって彼女には、東雲紫乃には”だれも敵わない” んだからね」

随分と大層な物言いに少しだけ眉をひそめる。

僕が知っている入学試験の結果とは少し違う、という事実は置いておくにしてもだ。彼が、マルコが、いとも簡単に、決して越えることができない壁の存在を認めたことは、僕にとってある種、それこそ新大陸でも発見したかのような衝撃があった。

「そう、誰もだ」

そんな僕の心の機微を読み取ったのか、強調するかのように、あ  
るいは少しだけ熱を込めて、話を進める。

「この学校の生徒に限らず、この国の人に限らず、この時代の人  
に限らず、全ての人が彼女には敵わない。

だから、僕は彼女に勝とうなんて露ほども思っていないし、入試  
の成績で彼女に劣ったことも、全く、少しも気にしていない。そも  
そもそんな発想すら浮かばないね。

だって、足の速さで新幹線に勝負を挑もうなんて思いつく奴、そ  
れこそまだスーパーマンになることを諦め切れていない少年くらい  
のもんだろ？

所詮人間がどうあがいたところで、空も飛べないし、毎秒10ペ  
タ回の演算もこなせないし、東雲さんにも敵わないんだ」

なんて、君にはただの負け惜しみにしか聞こえないのだろう  
けど。

そう言い放ったマルコは、本当に微塵も気にしている様子はなく、  
むしろ、それこそスーパーマンの凄さを語る少年のような輝きを放  
っていた。

九重高校入学試験で化け物染みた成績を叩き出したマルコをして  
そこまで言わしめた東雲さんなる人物に、興味を抱いてかないと言  
えば、やはり嘘になるのだろうか。

「それで、その東雲さんがいったいどうしたんだよ」

僕のせいで話が逸れてしまったみたいなので　マルコもまさか東雲さん自慢がしたかった訳ではあるまい　軌道を修正すべくマルコに真意を訪ねる。

「実は東雲さん、自身の研究室を持つ許可が下りたらしいんだ。まだ1年生の彼女がそれも入学して一ヶ月もたつてないこの時期に、だ。」

今になって考えてみれば、まあ彼女にならありえない話でもないが、それにしても、天下の九重高校の伝統文化を捻じ曲げることが、たかだか一人の人間にできるなんて思いつきもしなかったよ」

知つての通り、九重高校で自分の研究室が持てるのは2年生からだ。

この伝統は、1年生と2年生の能力の差に依拠している訳ではなく、どんなに優秀な学者でも他人から学べる機会を大切にすることだ、という初代校長の方針から、他人の研究を見て視野を広げる事を目的としている。

そのため、いくら優秀な生徒がいたところで1年から研究室を持つことは例外なくできず、最低でも1年間は経験を積まなければならないシステムになっているのだ。

ところが、その例外が今年になって誕生したと言うのだ。

東雲紫乃。

一体どういう人物なのだろうか。

どういう手段をつかって、九重高校の伝統を捻じ曲げたのだろうか。

人間には超えられない、というマルコの評価も、この話が本当な

らばあなたがち大げさとも言えないのかもしれない……。

「おいマルコ、いい加減往生際が悪いぞ」

「あれを見れば誰だって怖気ずくだろう!!」

それとも千秋、君には彼女に集まる視線が見えないとでも言うのか!!」

今は昼休み。

僕とマルコは2年のイヴさんの教室の前まで来ている。

マルコの『エルフの女の子に和服を着て貰おう大作戦』を決行するためである。

朝宣言した通り、エルフ族の少女、イヴ・タイラーさんに和服を

着てもらえるようお願いしに来たのだ。

しかし、クラスメイトの声援を受け（よっ！！日本男児！！）、あれだけ意気揚々（？）と出発してきたにも関わらず、彼女の周囲の状況を目の当たりにして、ものの数秒で心が折れてしまったようだった。

整った、なんてもんじゃない。

あるいは、あらゆる国で祀られている美の神が力を合わせて作った最高傑作が彼女なのかもしれない。

そんな戯言の真偽はともかく、見る者にそんな感想を抱かせるような何かを、彼女は持っていた。

透き通るような白い肌に、幻想的な輝きを放つ、白みがかった金色の長髪がよく映える。

全てを包み込むような優しい面立ちに、しかし強い意志を宿したような瞳に思わず目が奪われる。

なるほど。

確かに”人間離れ”している。

教室の入口、つまり今僕たちが立っているところの割とすぐ近くに座るイヴさんの周りには、まっすぐと物憂げに、もしくは本人にばれないようちらちらと伺うように、彼女を見つめる目、目、目。

授業の予習でもしているのだろうか、髪をかきあげノートに字を書き込む彼女の一挙手一投足にクラスの教室内の男子の大半、もしくは女子の数名が見入っている。

しかし、当のイヴさんはその視線のことが気にならないのか、はたまた努めて気にしないようにしているのか、黙々とノートに何かしらすを書き込んでいた。

確かに、こんな中視線の的に声をかける勇気があるものはそうそういないだろう。

人間だれしも過度な注目は避けたいものだ。

「まあ、気持ちは分からなくもないがな。

でもマルコは、最初からこうなることぐらい予想できていたんだろっ?」

「う……確かにそうだが、でもやっぱり限度というものがある。

これじゃあただの公開処刑じゃないか」

「別に断られると決まってる訳じゃあるまいて。

……でもまあ、仕方ないか。日本男児だなんだと言って担ぎあげた僕が悪かったよ」

「だから、なんでその一言につられてきたという設定を押し通そうとしてんだよ。

クラスの連中もやたらと叫んでたし。

やっぱり君らは馬鹿なんだろう。もはやそれ以外に検討の余地もないほどの馬鹿だ」

「馬鹿馬鹿言っな!! 先生に言いつけるぞ!!」

「男の幼児退行なんて不快なものを僕に見せるな!! はあもう勝手にしろ」

「言ったな? 本当に勝手にしていいんだな?」

「ああ、もうどうにでもすればいいさ。君の相手は僕には荷が重す

きるよ」

なかば投げやりになるマルコに、少しやりすぎたかなあと心配する。

お詫びという訳ではないが、今日一日ぐらいはマルコをいたわってやるべきかもしれない

「こんにちは、イヴ先輩。僕は1年2組の秋山千秋と申します。

そしてこちらで頂垂れているのが、同じクラスのマルコ・フェスタです。

今日はこちらの彼が、先輩に折り入ってお願いがあると言つことで、伺わせていただきました。今お時間大丈夫ですか？」

なんちって。

「わかった。君は僕のことを嫌いなんだろう!？」

教室の入り口から教室の中を覗き込む形でイヴさんに声をかけた。それまで黙々と作業をしていたイヴさんの手が止まりこちらを見上げる。

それにつられて、彼女をそれとなく眺めていた周りのクラスメイトの方々の視線が、僕と、僕の右手にがっしりと掴まれたまま、頭を抱えて大きなため息をつくマルコにあつまる。

「あら、「ご丁寧にありがとうございます。私はイヴ・タイラーと申します。」

なるほど、あなた方があのマルコ君と千秋君ですか。以前から一度お会いしたいとは思っていましたが、こうしてお話できるなんてとても嬉しいです」

「恐縮です」

急に押しかけたにも関わらず、年下の僕たちに大して丁寧に対応し、「あまつさえ”嬉しい”とまで言われたら、恐縮せずにはいられない。」

甘いマスクに、一年生トップの もといトップクラスの成績を持つ才色兼備の彼には、入学して一ヶ月にしてすでに熱心なファンが結構な人数ついたと聞く。

いくらここが天下の九重高校とはいえ、通っているのは思春期真っ盛りの少年少女だ。

生徒間の恋愛沙汰なんかももちろんあるし、その辺は普通の高校生と何も変わらない。

そんな中で、マルコやイヴ先輩のような神に愛された人間は常に生徒たちの噂的であり、こうして学年を越えて名前が知られているのも当然と言えば当然だ。

そして、そんなマルコと行動を共にすることの多かった僕も、セツトで名前を覚えられていたのだろう。

しかし僕自身は彼らのようなタレント性を持ち合わせている訳ではないので、少しだけ肩身が狭いというか、分不相応な扱いを受けているような気分になる。

そういった背景もあり、マルコならともかく、おまけのようなポジションの僕にとっては、今のような多くの視線を一手に受けるような状況は、とても居心地が悪かった。

「ここではなんですし、場所を変えませんか？」

「あらあら、もしかして愛の告白ですか？」

場所の移動を提案した僕に、暖かい笑顔を少しも崩さずにあげつない場所にクリアパスを繰り出すイヴさんのせいで、一瞬にして周りの空気が凍る。

一気に刺すような視線が集中し、マルコの顔が真っ青になった。

「まあ、似たようなものです」

「他人事だと思って適当なことを言うのはやめる千秋！！」

それにイヴさんも、二人とも僕を殺す気ですか！？

告白なんてめっそももないです、僕だって流石に身の丈くらい弁えています！！」

前半は僕とイヴさんにしか聞こえないような小さな声で、後半は周囲のギャラリーにも聞こえるような大きな声で釈明するマルコ。

この混沌とした状況が、未だに小首をかしげながらにこにこしているイヴさんを見ただけでは、天然の産物なのか、それとも故意に作られたものなのか、僕には判断がつかない。

もし後者なら、あるいはトラウマとしてマルコの心に刻み込まれ

る一場面にすらなりえるだろう。

その空間を逃げるように後にしたマルコに続き、僕とイヴさんは落ちついて話が出来る場所へ移動を開始した。

## プロローグ Ⅴ

僕たち一行は落ちついて話せる場所を求めて購買部横のラウンジまで来ていた。

昼休みということでもそれなりの賑わいを見せていたが、流石にこちらの動向を露骨に伺ってくるような輩はおらず、おそらく会話に聞き耳をたてられている、ということもないだろう。

といっても、表向きの目的は和服を着てくれるように頼むだけなので人目を気にする必要もあまりないのだが、まあこちらの精神衛生上の問題だ。

それに、現状の把握、つまり今僕の身の回りに起きている諸々のアクシデントの実態把握、という言わば裏の目的を果たすためには、人目が少ないに越したことはない。

しかし、流石にマルコとイヴさんが揃うと否応なく人目を引くため、さつきほど露骨ではない、と言うだけで、こちらを見つめる視線がいつにもまして多いということに変わらないのだが。

「それで、お願いというのは？」

購買で飲み物を買った席に腰を落ち着けて早々、イヴさんが本題を切り出してきた。

それに答えるのは僕ではなくマルコの役目なので、黙ってマルコの話を待つ。

「あの、非常に不躰な話で恐縮なのですが、その……和服を、着て

いただけないものかと ……」

「いいですよ？」

「へ？」

しどろもどろで要領を得ないマルコの頼みに、間髪入れずに首肯するイヴさん。

いきなり断られることはないにしても、もう少し詳細くらい聞かれるだろうと覚悟してただけに、情けない声をあげたマルコの気持ちも少なからず理解できた。

「和服を着ればいいんですよね？」

私、昔から憧れてたんですよ、和服。

着たくてもそうそう手に入るものでもないし、レンタルして着るほどのきつかけもありませんでしたし。

そういう頼みなら喜んでお受けします」

なるほど、日本の女の子が異国のお姫様が着るドレスに憧れるようなものか。

マルコほどではないが、近年日本の文化に興味を持つ海外の人も増えていると聞く。

日本の伝統衣装に興味を持つ外国人がいても、さほど不思議なことではないのかもしれない。

「イヴさんは日本に來られて長いんですか？日本語も随分お上手で

すし……」

そこまで言っつて、マルコが驚愕と困惑が入り混じった目をこちらに向けていることに気がついた。今にも口を空けて「は？何を言っているんだ君は？」と言わんばかりだ。

しかしその意味に気付く前にイヴさんから質問の答えが返ってくる。

「私は日本生まれ日本育ちですよ？」

父はパシフィカ連合の出ですが、母は端系2世で、祖母の代からこの付近の住宅区に住んでいます。

幼少期に数年間だけ向こうに住んできたこともありますが、小中学校だって地元の公立校に通っていたんですから」

しまった。

外見こそ日本人のそれとはかけ離れている、というか文字通り人間離れしているが、それと出身地とを結びつけるのは、あまりにも短絡的過ぎた。

日本にエルフが多い、というのは、単に観光客が多いという訳ではなく、日本に移住したエルフ族が結構な人数存在している、という意味だったのだ。

僕は馬鹿か。

外見から出身が判断できなことから、僕が一番よくわかっていない事じゃないか。

その上、小中共にこの近辺ということは、彼女も僕と同様七里塚

中学の出身ということだ。近辺に3校ある小学校とは違い、中学校は1つしかないと、少なくとも2年間は同じ校舎に通っていたことになる。

同校の出身とはいえ、1000人以上の生徒数を誇るマンモス校では互いの存在を知らないまま卒業していくことなんて特に珍しい話でもないのだが、ことイヴさんに限っては通用する話ではなかった。

一日、この学校の様子を見ていけば分かる。

同じ学校にいて彼女を知らないなんて、土台あり得ない話なのだ。

うかつだった。

当のイヴさん本人はどうかわからないが、この様子だとマルコはとっくに気付いているだろう。

同じ学校に通っていないながら、彼女のことを何も知らない”僕”という存在の異様さに。

しかしマルコはそれを口に出すことはなく、僕の代わりに話を引き継いだ。

その後、これ以上ぼろを出すわけにもいかず、かといって急に黙るのも不自然なので、適度に相槌を入れながら専ら二人の会話の聞き役に徹した結果、いくつか新しいことが分かった。

一つ目は、彼ら、つまりエルフや小人たちは、その殆どがパシフィック連合国に住んでいる、ということ。

”パシフィック連合国”というのは、太平洋の真ん中に突如出現した 僕の主観では、だが パシフィカ大陸にある国だ。

その中に、小人族やエルフ族など、僕から見ればファンタジーの世界の住人たちが住んでいる、ということだ。

そして二つ目は、パシフィカ連合国から日本に移民してきた人は割と多い、ということだ。

イヴさんが先ほど言っていた端系というのは、パシフィック系の略称で、彼女のお父さんが2世らしいから、おそらくは戦後辺りにはすでに結構な人数いたのだろう。

これについてはなんらかの、おそらくは歴史的な背景があると考えていいだろう。

これらは、彼らにしてみれば他愛のない世間話なのだろうが、僕にとつては、この変化に他する仮説を立てる上でカギになるかもしれない、とても有益な情報だった。

その後、実際に和服を着てもらった日にちを決めたところで予鈴が

鳴ったので、次の授業がある教室へ行くためにラウンジを後にした。目的地在別方向なので、イヴさんとはすぐに別れ、マルコと二人っきりになった。

「なあ、千秋」

来たか。

「どうしたマルコ？次の授業始まるぞ？」

足をとめたマルコに、平全を装って尋ねる。  
しかし、この二人つきりになったタイミングでしてくる質問などもはや考えるまでもなく”あれ”しかない。

「”どうした”だって？それはこっちのセリフだ。」

いったいどうしたんだ千秋？

今日の君は明らかに不自然すぎる。

何かあったなら教えてくれ、何もなければ何もなしに振舞って見せてくれ。

君の演技は下手くそで、ばればれで

「

見ていてイライラするんだ。

そう言い放って悲しそうな表情でこちらを見るマルコ。

この様子じゃ、僕に”何か”が起こった事を初期の段階で察していたのかもしれない。

こちらは気付かれないように細心の注意を払っていたつもりだったが、彼は何かしら違和感のようなものを抱いていたのだろう。

そして、先程の僕の一言だ決定打になった。

これだから頭がいいやつ相手は苦手なんだ。

しかし、彼に今僕の身の上で起こっている状況を話したところで、それを理解してもらえらるだろうか。

今となっては僕にだって上手く説明できないかもしれない。

昨日まではなかったものがあって、ファンタジーの世界の住人が現実に出てきて、知らない人がいて。

果たして、こんな突拍子もない事を言い出して、はいそうですかと受け取ってもらえるのだろうか。

「まあ、言い辛いことならば無理には聞かない。

しかし、君のその憔悴しきった顔は見るに堪えない。目も当てられない。

黙っていたいなら、誰にも聞かれたくないのなら、もう少し隠す努力をしてくれ。もしそれを出来る自信がないなら、今すぐここで何があつたのか言ってもらおう。

それさえも出来ないのなら　君とはこれつきりだ」

弱ったな。

僕としてはうまく隠していたつもりだったのに、さらにそれ以上のクオリティを求められるのか。

決定打以外はどこが悪かったのかも分からないのに、改善なんて

できないだろう。

いや、この期に及んでまだ僕は隠そうとしているのか？彼にここまで言わせておいて、僕は逃げる気にいるのか？

「少し、考えさせてくれないか？

僕の中でも、まだ答えが出ていないんだ。

でも、ちゃんと整理がついて、何があったのか、何が起こっているのか、僕の中で決着がいたら、そのときはマルコに話すよ」

他人から信頼を勝ち得るのは、そんなに簡単なことじゃない。

一つ一つ石を積み上げて造る石の塔のような物で、絶妙なバランスを保ちながらそびえたっている。

しかし、その塔が高くなればなるほど、一つ選択肢を誤れば、一つ境界線を越えてしまえば、一つ力加減を間違えば、呆気なく崩れてしまう。

「……君はあくまで僕に頼る気はないんだね。

分かったよ。

ただし、連休が明けてもまだ答えが出ないようなら僕にも協力させて欲しい」

僕たちが作り上げた塔はまだ発展途上で、そこまで高いものではない。

それが信頼と呼べるものなのかどうなのかすら、正直僕にはまだ分からないし、彼にすべてを話すことで、せつかくここまで造った

塔が倒れてしまうことが、たまたまなく怖い。

「ああ、そのときはよろしく頼む」

でも、このとき確かに、塔がより強固に、揺るぎのないものになったような気がしたのだ。

「次の授業はさぼる。」

先生によりしく伝えといてくれ」

そうマルコに一言残し、何か言われる前にその場を後にした。  
あんな青春ドラマみたいなやり取りをした後で気恥ずかしいのと、今後の事を一人でじっくり考えたいのとで、あまりこの場にはいたくなかったからだ。

誰もいない場所を求めて屋上へ向かう。

この学校の屋上が別段閉鎖されていたりするわけではないのだが、昼休みが終わりもつすぐ授業が始まるこの時間帯にあんなところで油を売っている生徒はそうそういないだろう、と踏んでのことだ。

階段を一番上まで登り、屋上への扉に手をかける。

僕が正確に覚えているのはここまでだ。

後から聞いた話によると、「どうやら僕はここで”気絶していた”らしい。」

それが本当なのかどうかは、僕の知るところではない……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3977z/>

---

マジ ぼわ

2011年12月14日18時49分発行